

Plane Indians

March 23, 2008

今年のイースター、グッドフライデーの連休は南に足を運びました。昨年、ネブラスカの北西の端までゆき、そのとき、途中で雪にあいましたので、この時期、やっぱり南に行くにかぎるということになりました。

カンザスの北部には、かつて **Pawnee** 族のインディアンが、大変な繁栄を誇っていたとのこと。その **Pawnee** 族の博物館を訪ねました。というのは、昨年カンザスを走りまわりましたときの帰り道、ふと立ち寄った博物館、ここは、**Republic** という郡の田舎の町の博物館で、この地域を開発したときに出土した様々なインディアンの文化遺産やら、もっとずっと昔の化石などが展示されていたところ。アメリカの田舎に行きますと、この類の博物館は至るところにあるのですが、ここで、その案内をしていた方が、ここまできたら是非とも、近くに **Pawnee Indian** の博物館があるから、ここに是非行くようにとのお勧めであった。そんなわけで、この一年間、何時かチャンスがあれば尋ねてみたいと、町に待ってやっと念願が叶ったというわけ。

その **Pawnee Indian Museum** これがまた、凄い田舎の中にあるなど思いも寄らなかったのですが、ナビのおかげで、こんなところによくも博物館を作ったなというような大草原の真ん中にこの建物がありました。それもそのはず、この博物館は、かつてここに **Pawnee** 族が住居を構えていたところで、その住居跡が発見されて、ここに博物館をつくったとのこと。アクセスはちゃんとした道路、266 号線が敷設されていて、私は、その反対側からいったということで、これはなっとく。その博物館は、丁度、日本で言えば登呂遺跡という感じ。したがってここはとても学術的に意味のある遺跡で、ナショナルパークのように、これを紹介してくれる係りの人がいて、入館すると、これがまた、待っていましたとばかり、とくとくこの遺跡について紹介してくれるのである。確かに、こうしたところまで足を運んでくれるような人は、その数も少ないし、それなりの興味をもった人ばかりだから、それはそれは、丁寧に説明をしてくれるのである。この遺跡のいわれから、歴史的な出来事、そして、ここに来て、本当に勉強になったという感激をして帰るのである。

その説明によれば、ここに、かつては、農耕を主体に生活していた **Pawnee** 族の大集落があり、一つの建屋には数十人の人たちが、共同生活をしていたら

しい。その家屋は三階建てくらいの高さがあり、屋根には土は塗ってあったというから、丁度、Lewis と Clark の探検のなかで紹介されているアースロッジのようなもの。ここで、二千人くらいの人が暮していたという。集落は、城壁のようなもので囲まれており、来たにいた戦闘的な部族のスー族や、Mandans 族から守っていたらしい。

そして、最後に、日本語の説明文もあるから、これを見て、ほかに質問があればしてくれと、懇切丁寧という言葉がぴったりの案内でした。その日本語のパンフレットの一部を紹介いたします。但し、これは現地の人訳をしたもので、すこしたどたどしい日本語でしたので、私が意識をしました。

Kitkehahki Pawnee 村は、1820 年代にこの地に発見されたものです。30～40 ほどの小屋の集落で、ここには 1,000 人以上もの人たちが住んでいました。探險家で有名な **Jedediah Smith** は、この村に 1826 年にやってきたのですが、それは、彼が獵師のグループと共に、西に向かって旅を続けている途中のことでした。塙で囲まれている 22 の小屋は、6 エーカーの広さ(2.4 ヘクタール)の中にあり、初期にできたものは、ここよりさらになみな地域にと広がっていました。また、この村は、外からの防衛のために塙で囲まれていましたが、それは、この **Pawnee** 族は、いつも、**Plains** に住む民族、(**Plains** とは、ミシシッピー川からロッキーマウンテン、そして、彼方からメキシコにわたる広大な牧草地を意味しています。) からの襲撃の恐怖にさらされていたためです。この小屋の殆どは、直径 30～40Feet (約 9～12 メートル) 程でしたが、なかに 2 つの大きなものがありました。それは、おそらく、当時、かなりの権力者がいたことを示すもので、この建物が 1967 年に再現され、今日の博物館となっているわけです。その当時、この建物は、直径が 50feet (約 15 メートル)、面積は、2,000square feet もあったとのことでした。

以前に、ノースダコタのナイフビレッジというところで、やはりこうした土作りの家、アースロッジをみたことがありますので、そのつくりなどはよくわかっていたのですが、こうした、集落をつくり沢山の人たちが共同生活をしていたというのは、西洋人でも相当な驚きであったようです。それが、そのまま、この地を Republic というようになったと説明していました。

これで、とにかく、今回のドライブの一つの思いは叶いましたので、かなり気分をよくして、次の目的地のウィチタへ。この博物館への誘導路 266 号をでて、36 号線には行ったところに、Historic Marker が建っていた。これは、この地の歴史を紹介するもので、こうしたマーカをちょっと覗いてみるのも、イ

ンターステーツではなく、カウンティの道を走る醍醐味のひとつ。そこには、この土地の開拓の歴史、歴史的な出来事、そして、その土地の名前の由来などが説明されていて、一つでも見つけるととてもアメリカ通になったような気になるのである。そのために田舎道をドライブするのである。そして、この土地が、**Scandia** という町であることが初めて分った。つまり、この地に入植してこの町を開いたのはスカンジナビアから来た人たちだったというわけ。あとで地図を調べたら、直ぐ近くにノルウェーという町があった。これで納得というわけ。確かにアメリカには、至るところに、ヨーロッパやアフリカの国の名前を町の名前にしたところをよく見かけるのである。故郷をでて、ここに住みつくまで、どれだけ苦勞をしたことか。それがやっとここで何とか生活できるようになり、これで一安心ということで、自分のふるさと、国の名前をそのままその地の名前にしたのではないかと思われる。

ウィチタには、前回は、アートセンター でギターのライブを聴くことができ、そのハプニングに興奮して、やっと見つけた、インディアン博物館には、数分遅れで到着。中に入ることはできず、トーテムポールだけを見て残念無念。というわけで、今回は時間の余裕もあり、まずは、近くの **Cawtown Museum** に立ち寄る。ところが今度は、こちらが残念、会館は五月からだといっていた。でも、みやげ物屋は大丈夫だとのことで、ここで、暫くカウボーイグッズを探したが、これは、先日リンカーンで見つけたカウボーイのお店のほうが品物も豊富。そして、念願の **Indian Center Museum** に。ところが、なんと、ここも今改装中でした。つまり、今は観光シーズンではないので、至る所でシーズン前の準備中というわけだ。ここも土産物屋と、催し物をする広場は開いていた。ここでは、インディアンがなにかという集まり、お祭りをしているようだ。会館の中庭には、焚き火ができるほどの広さがあり、ここでインディアン達は伝統の踊りや、祈りをして、様々な年中行事をしているのではないかと思われる。そんな案内のパンフレットが沢山並んでいた。圧巻なのは、その中庭の天井から吊るされたインディアンの各部族の旗、つまり、部族が国とすれば、国旗のようにもの、それが、何十本と吊るされていたのだ。

ここで、記念品をと探していたら、ふと目に留まったものがインディアン
の質素ながらも清純さを感じさせてくれるような織物。これをなんに使うのかと尋ねたら、そこにいたお嬢さん、なんとなくインディアンの子孫のような素直な感じのする人で、正直に自分は知らないといっていた。すると、奥のほうから出てきたお兄さんが、そのお嬢さんに「こう広げて、肩にかけてみろ」と説明してくれた。お嬢さんがそのままモデルになり、その布の使い方を教えてくれた。よくインディアンがこうした布を纏っている姿を映画なんかでよく見

る。なら、記念に写真を撮らせてくれと、頼んだら、なにやら少し恥ずかしげに、にこっと笑い、気前よく応じてくれた。とてもその感じがよいので、ちょっといい値段であつたがこれを買うことにした。そういいながら、「それを来て、一緒に日本に来るかい?」といったら、何も言わずに顔を赤くしていた。そのしぐさがなんともいえない。おくから出てきたお兄さんが、どこから来たのかと聞くので、日本からだといったら、日本はどこかという。千葉と説明したら、よく知っていると。なぜそんなに日本に詳しいのか、今度はこちらが尋ねた。詳しいはず。彼は日本の岩国にいたことがあるという。つまり、軍にいて日本に駐留していたようだ。気分を良くして



実に清楚な少女でした

の、奮発し、カンザスのインディアンについての解説書を購入。

と、そのよこに、このミュージアムの説明書きをしたパンフレットがあつた。これが、また、素晴らしい。アメリカ大陸の中部に住むインディアン達のことを手際よく説明したもの。これだつ、私が欲しかったのは、と、つい、「How much_?」ところが、これまた、嬉しいことに、「それは、無料です。」ときた。というわけで、この本については、あとでしっかりと勉強するつもりですが、その中に紹介されたインディアンの部族をことをすこし、訳してみました。

東チェロキー部族

チェロキーは、当初は南アパラチア山脈の辺りに最初に住んでいました。村には酋長がいたのですが、しかし、部族の大事なことは長老たちが集まる会議で決定されていきました。部族の伝統は、母方、つまり、女性たちの系列を通して受け継がれていくというのが、この社会では非常に重要な役割を持っていたようです。彼らが最初に白人と接触したのは、1950年代のことで、捕虜となったチェロキーの女が、Desoto と彼の探検隊を彼らの土地に案内して来しました。

1835 年になり、チェロキーは、彼らの土地を合衆国政府に譲渡することになりました。その結果、一部の者達は彼らのふるさとに残り抵抗を続けましたが、部族の殆どは強制的にオクラホマに移住させられたのです。1925 年になり、彼らは North Carolina に自分たちの伝統的なほんの僅かの土地を返還されました。チェロキーは自分たちの書き言葉をもつ、北アメリカでも特異的な最初の部族の一つなのです。

チェロキーのこの強制移住のトレイルが、有名な、「Trail with Tears 」ということで、この部族を紹介しました。

ネブラスカ・ポンカ族

1700 年代の初めに、ポンカ族は彼らのふるさとサウスダコタからネブラスカにやってきました。1877 年になり、政府はポンカの酋長をオクラホマのインディアン保護地域に視察に送りましたが、酋長はその土地があまり気に入らなかったのです。しかし、彼がふるさとに戻ると、部族の大部分のものは、すでに移住をする用意を済ませているという状態だったのです。オクラホマに彼らが移り住んだのはよいのですが、しかし、彼らはそこで食料を手に入れることができず、部族の沢山のものが病気で倒れてしまい、部族の 1/3 近くの人が亡くなってしまいました。酋長のスタンディング・ベアの息子がなくなると、彼らの一族は、その体を密かに、ネブラスカに運び、神聖なる地に埋葬しました。インディアン達は、居留地から出ることを認められていなかったのも、彼らは、裏切り者として扱われるようになったのです。そして、スタンディング・ベアと彼の一族が自由になるにはそれから何年も掛かったのです。1881 年になり、ネブラスカにあった彼らの故郷の地が彼らに変換され、部族の一部はネブラスカに戻りました。そして、今日、ネブラスカ・ポンカの本拠地がネブラスカに置かれるようになったのです。

ネブラスカ・ポンカは、スー市の西にあるヨンクトン辺りがふるさととも思います。

こんな調子で、アメリカ中部に住んでいたインディアンの 40 近くの部族の短い歴史が、彼らの部族の象徴でもある旗の言われとともに紹介されています。これは、あとで、まとめて報告書を作ることにします。

実は、このオクラホマにポンカ・シティーというのがあるのです。この地がネブラスカ・ポンカと関係のあったことは確か。その町に、**Pioneer Women Museum** というのがあるので、インターステーツからすこし道を外れるのですが、まだ、閉館の五時にすこし時間がありましたので、開いているなら、五分でも見てみようここにまっしぐらに車を走らせました。ところが、やっと見つけたこの博物館、まだ、閉館まで二十分もあるのに、もう今日は閉館と、ドアがロックされていた。これはおかしい、とばかり裏に回り覗いてみたら、中に係官がいて、今日はもうおしまい、とつげない返事。折角、ここまで来てあげたのにという気持ちもあり、「まだ、十分も残っているよ。何とか見せてよ」と頼んでも、「明日、またおいでよ」とそっけない。こちらは、ここまで、五百マイルも走ってきたのだ、見せろといいたかったが、ここは断念。名残惜しいので、この開館を一回りしていたら、スーッと別の車が駐車場について、なかから数人の子供が走り出てきた。そして、玄関に一目散。まだ、五分は残っているといわんばかり。付き添いのお母さんも、「まだ、大丈夫よ。」とっている。それなのに、玄関のドアは、しっかりと閉められたまま。子供たちも文句を言いながらも諦めた様子。そして、前の庭に建っている高さ数メートルはあるかという銅像によじ登り、記念の写真を撮っていた。この銅像、かつて、開拓民のお母さんとして辛苦を耐え忍んできた人がモデルになっているのだろう。子供を従えて、堂々とした風格であった。さすがに私は銅像に昇ることはできなかったが、子供たちにつられて、私もこの銅像の前でパチリ。

その **Ponka City** を離れるときにふと目に入ったのが、これがまた立派な工場。道路に面した工場の塀には、なんとトラックの出入りするゲートが幾つもあった。工場からは排気ガスのための高い煙突が何十本と建っていたから、これは、塗装工場かもしれない。となると、自動車かあるいは、その類の工場であるに違いない。ということで、これを調べてみたら、なんと、ここには、**Conoco** リファイナリーの工場があるとあった。もともとは、**Marland** という石油会社がこの地に設立され、後に **Conoco** と合併したとのこと。なるほど、これで納得。さすが、でかかった。

南にいくに従い、緑が多くなってきました。もうすぐ春ですね。なんと、この **Ponka City** には、桜が満開でした。

Historical accounts of white settlers and the oil industry in Ponca City have often overshadowed the area's Native American population and its influences on the culture and history of the city and its environs.

Ponca City is named after the [Ponca](#) Tribe, part of which relocated from [Nebraska](#) to northern Oklahoma from 1877 to 1880. Like all of the forced American Indian removals of the 19th century, the Poncas' trek was arduous. A number of Poncas who made the initial journey died from illness and exposure to the elements while following a group of leaders to northern Indian Territory (now northern Oklahoma).

Part of the tribe was displeased with the living conditions on the land where they initially settled, and they were led on a journey toward their traditional home by the legendary civil rights leader [Standing Bear](#) in 1879. However, Standing Bear was arrested, and most of the tribal members who left eventually returned to the reservation in Oklahoma. The story of [Standing Bear](#) is perhaps best told by the memorial in his name, which stands at the intersection of Highway 60 and South Fourth Street in Ponca City.

The [Ponca](#) Nation, which has kept its headquarters south of Ponca City since 1879, played a major part in developing the Marland Oil Co. and the city proper when Chief White Eagle signed away valuable portions of the tribe's allotted land. In fact, the respected Ponca leader signed over the lease to the land on which [E.W. Marland](#) made his fortune in 1910.

In recent years, the [Ponca](#) Tribe has made a number of moves to build its infrastructure and improve services for its people. In February 2006, the tribe received a grant of more than \$800,000 from the [Shakopee Mdewakanton Sioux](#) Community of [Minnesota](#) for debt retirement and economic development.

Ponca City is bordered by, or in close proximity to, other Native American tribes, including the [Kaw](#), [Osage](#), [Otoe-Missouria](#), [Pawnee](#), and [Tonkawa](#).

その Ponca City だけでなく、この日の宿泊地 Enid にも、石油のリファイナリーのプラントがあったぞ。こんなところにも石油がでるのだ。確かにこの町はガソリンが安い。と、感心しながら、この日のドライブが幕を閉じたという

わけです。

二日目

Enid ～Tulsa まで

夏時間のためか、すこし日の出がおそいようでしたが、七時にはモーテルを出る事にしました。この日はオクラホマの南をぐるりと周り予定で少し時間的には窮屈になるかもしれないとの思惑があったからです。

Fairfivill あたり、オクラホマでも随分西に来たという感じ。大草原に開かれた農場が延々と続くセントラル地域と違い、このあたりになるとすこし草原に起伏があり、丘陵という感じです。これがまた、アメリカの広さを実感させてくれます。

Canadian River の橋を渡る。なんと、これがまた、Tulsa に行く途中でわたった橋が、この Canadian River にかかる橋でした。

この後、旅の途中の話

Anadarko

Southern Plains Indian Museum

National Hall of Fame For Famous American Indians & Anadarko Visitor Center

Indian City USA

どこに行っても顔をあわせる年寄りグループ

インディアン歴史について勉強しているようであった。

Lawton でパトカーに追いかける

なんと、なんと、ここはミリタリーの基地内。カメラで写真を撮ったりしていたら、たちまち、スパイと勘違いされる。

誤解が解け、基地内をパトカー先導でドライブ。気分最高？

Duncan の町で、アンティークのお店に入る。ここが今回の南の果てでした。

Tulsa の町を散策。

ダウタウンに大きな教会が沢山。

歴史を思わせる

ターンパイクを突っ走る。

Joplin の町へ。

そして、Fort Scott

懇切丁寧な説明に感激

Athison

White Clouds へ

素晴らしい田舎道

Lewis and Clark のトレイル

Nebraska の歴史

Rola の町で、橋を二度渡る

1887 年の記念碑